

二十年もの間、親鸞さまは比叡山延暦寺で主に「堂僧(どうそう)」として厳しい修行や学問に専念した。もともと下級貧乏貴族の出身であつた彼は当時の比叡では、もう、そこで限界であったし、それ以上に、当時の「仏教」そのものに疑問を感じざるを得なくなつた。二十九才のころ、彼は比叡を捨て、当時、「漏僧」(ろうそう)とか「聖」(ひぢら)とよばれていた、民衆社会・大衆のなかで悟りの道を追求しようと励んでいた集団の中に身をおき、新たな仏道をもとめようとした。

比叡の山麓「よしみず(恵)」の法然上人のもとへ通い、そこではじめて庶民が救われる「專修(せんじゅ)」念佛」の教えに出会うことができた。

法然さまの教えは学問的にも実践的にも旧仏教や貴族社会には相い容れないものであつた。当然、特に旧佛教教団からは猛烈な弾劾に会い、結果「承元(じょうげん)元年」朝廷の命によつて法然や親鸞など吉水教団は犯罪・死罪。少なくとも京からは完全に追放されてしまつた。

法然さまは土佐へ親鸞は越後へ流配。親鸞はそのとき三十五才。妻子を伴つて以降四十才のころまで、妻「惠信」の縁故の地で暮らした。以後二・三年は善光寺の「聖(ひぢら)」として流浪し、結果、関東常陸(ひだち)「稻田」(ひだぞう)を中心にして爾後二十年のあいだ関東から北陸へかけて法然の説いた念佛の道を伝えた。その布教伝道のなかにありながら彼の今一つの課題は、法然さまの著『選択本願念佛集』に対する旧佛教がわからずる非難攻撃。たとえば、当時希代の仏教学者梅尾の高弁(明惠上人)からの理論的念佛彈劾『摧邪輪(さいじゃりん)』などへの教学的反論といふべき『顕淨土真実教行証文類』

二十年もの間、親鸞さまは比叡山延暦寺で主に「堂僧(どうそう)」として厳しい修行や学問に専念した。もともと下級貧乏貴族の出身であつた彼は当時の比叡では、もう、そこで限界であったし、それ以上に、当時の「仏教」そのものに疑問を感じざるを得なくなつた。二十九才のころ、彼は比叡を捨て、当時、「漏僧」(ろうそう)とか「聖」(ひぢら)とよばれていた、民衆社会・大衆のなかで悟りの道を追求しようと励んでいた集団の中に身をおき、新たな仏道をもとめようとした。

比叡の山麓「よしみず(恵)」の法然上人のもとへ通い、そこではじめて庶民が救われる「專修(せんじゅ)」念佛」の教えに出会うことができた。

法然さまの教えは学問的にも実践的にも旧仏教や貴族社会には相い容れないものであつた。当然、特に旧佛教教団からは猛烈な弾劾に会い、結果「承元(じょうげん)元年」朝

界であつたし、それ以上に、当時の「仏教」そのものに疑問を感じざるを得なくなつた。二十九才のころ、彼は比叡を捨て、当時、「漏僧」(ろうそう)とか「聖」(ひぢら)とよばれていた、民衆社会・大衆のなかで悟りの道を追求しようと励んでいた集団の中に身をおき、新たな仏道をもとめようとした。

比叡の山麓「よしみず(恵)」の法然上人のもとへ通い、そこではじめて庶民が救われる「專修(せんじゅ)」念佛」の教えに出会うことができた。

法然さまの教えは学問的にも実践的にも旧仏教や貴族社会には相い容れないものであつた。当然、特に旧佛教教団からは猛烈な弾劾に会い、結果「承元(じょうげん)元年」朝

老いの中の親鸞さま



(お釈迦様直接のおしえ(經)や、以降高僧がたの書かれた論書から、法然さまの正当なことを証拠として示し、念佛こそ眞の仏教と頗るわすための書)を、法然さまへの報恩のためにも世にだす仕事であつた。

法然様は親鸞四十才のころ既に亡くなつていたし先輩の人たちも弾圧のため次々に流罪にあつたりして亡くなつてゐる。法然様の遺骸さえ暴かれたりその著書の版本さえも焼却されたときく。京都のお念佛はどうなつてゐるのか。親鸞さまはいたたまれない気持ちで、六十才を越えたころ、妻子を伴つて京都へ帰つて來た。

すえ娘(覚信尼)が日野某に嫁いで東山に住んでいる。弟たちはそれぞれ天台僧侶の位を得てそれぞれの寺に住持していたはずである。

しかし、当時の京都は天変地変や政変相次ぎ妻子を連れたかれらが長く安住できる所ではなかつた。八十才を越えたころには妻子は妻の故郷越後へ帰している。

なんとしても、まだ未完の「教行信証」を書き上げてしまわなければならぬ。法然さ

まのご事蹟も親鸞なりのものを纏めて置きたい。しかし落ち着いて住むところもない。おそらくあちこち転居をかさねたあげく西の京、五条西洞院、このあたりが「これひとつ勝地なりとて」この辺に長く住まわれたと、のち孫の覺如は伝えている。

ここに住んだ親鸞になにがあつたのか。

一つはいままでとは違つて社会最底辺の人達との出会いである。極悪深重の凡夫の境位からその人達と一緒にご本願を仰ぐ親鸞様であります。たくさん作った『和讃』はそのころの親鸞さまの息づかいを伝えます。

今一つはその位置からの弟子たちへの対応です。

唯円という若い僧が伝えた親鸞さまの日々の実像を活写した『歎異鈔』にその姿が伺えます。(次号から、「弟子たちへの対応」と庶民と「和讃を唱和しながら浄土を仰いだ最後年の親鸞様、へと続く)

各家庭に配布いたしましたご案内の通り、勝林寺では、左記の二つの行事について広く皆様のご参加を募っております。ご門徒の皆さんには勿論のこと、知人・友人・御親戚の皆さんにも声をかけていただき、多くご参加をお待ちしております。

納骨研修旅行

日時 六月二二日(土)二三日(日)
主な行程
西本願寺→大谷本廟→岡山湯郷温泉(泊)

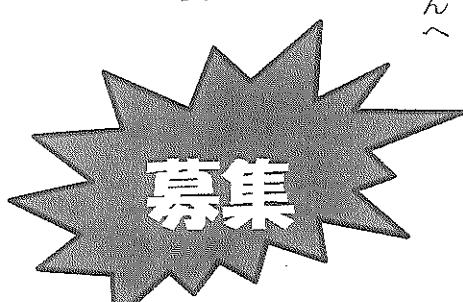
法然聖誕生寺→倉敷・岡山→牛窓
四日(土) 湯口年枝宅 七回忌
四日(土) 出石組 三役会

費用 男性33,000円
女性30,000円
五日(日) 坂本晃宅 一三回忌
六日(月) 出石但東仏教会

申込方法 地区仏婦評議員さんへ
締切 一次 五月二六日
二次 六月九日
九・十日 花まつり

親鸞聖人750回
大遠忌法要
一一日(土) 福富護宅 三回忌
一八日(土) 降誕会
一九日(日) 中島登美男宅 一三回忌
二六日(日) 永井均宅 一三回忌
二六日(日) 高福寺 永代経
二七日(月) 兵庫教区 実践委員会

稚児行列



対象	内容
対象	稚児衣装を身に着け、町内約五〇〇メートルほどのお練り、記念撮影、
費用	本堂でのお練りなどへの参加
締切	0歳~小学校3年生程度
費用	(但し、一人で歩くことが困難と思われる場合は、保護者の付き添いをお願いします。)
締切	六月末日

(敬称略)

五月 勝林寺 予定

花まつり 役員会

一日(水) 出石但東仏教会
二日(木) 中島敏博宅 納骨

三日(金) 足立幸夫宅 一周忌

三日(金) 中村ゆかり宅 三回忌

三日(金) 専福寺 永代経

四日(土) 湯口年枝宅 七回忌

四日(土) 出石組 三役会

五日(日) 坂本晃宅 一三回忌

六日(月) 出石但東仏教会

花まつり

九・十日 念仏奉仕団

一一日(土) 福富護宅 三回忌

一八日(土) 降誕会

一九日(日) 中島登美男宅 一三回忌

二六日(日) 永井均宅 一三回忌

二六日(日) 高福寺 永代経

二七日(月) 兵庫教区 実践委員会

花まつり

一日(水) 出石但東仏教会

二日(木) 中島敏博宅 納骨

三日(金) 足立幸夫宅 一周忌

三日(金) 中村ゆかり宅 三回忌

四日(土) 湯口年枝宅 七回忌

四日(土) 出石組 三役会

五日(日) 坂本晃宅 一三回忌

六日(月) 出石但東仏教会

花まつり

九・十日 念仏奉仕団

一一日(土) 福富護宅 三回忌

一八日(土) 降誕会

一九日(日) 中島登美男宅 一三回忌

二六日(日) 永井均宅 一三回忌

二六日(日) 高福寺 永代経

二七日(月) 兵庫教区 実践委員会

花まつり

一日(水) 出石但東仏教会

二日(木) 中島敏博宅 納骨

三日(金) 足立幸夫宅 一周忌

三日(金) 中村ゆかり宅 三回忌

四日(土) 湯口年枝宅 七回忌

四日(土) 出石組 三役会

五日(日) 坂本晃宅 一三回忌

六日(月) 出石但東仏教会

花まつり

九・十日 念仏奉仕団

一一日(土) 福富護宅 三回忌

一八日(土) 降誕会

一九日(日) 中島登美男宅 一三回忌

二六日(日) 永井均宅 一三回忌

二六日(日) 高福寺 永代経

二七日(月) 兵庫教区 実践委員会

花まつり

一日(水) 出石但東仏教会

二日(木) 中島敏博宅 納骨

三日(金) 足立幸夫宅 一周忌

三日(金) 中村ゆかり宅 三回忌

四日(土) 湯口年枝宅 七回忌

四日(土) 出石組 三役会

五日(日) 坂本晃宅 一三回忌

六日(月) 出石但東仏教会

花まつり

九・十日 念仏奉仕団

一一日(土) 福富護宅 三回忌

一八日(土) 降誕会

一九日(日) 中島登美男宅 一三回忌

二六日(日) 永井均宅 一三回忌

二六日(日) 高福寺 永代経

二七日(月) 兵庫教区 実践委員会

花まつり

一日(水) 出石但東仏教会

二日(木) 中島敏博宅 納骨

三日(金) 足立幸夫宅 一周忌

三日(金) 中村ゆかり宅 三回忌

四日(土) 湯口年枝宅 七回忌

四日(土) 出石組 三役会

五日(日) 坂本晃宅 一三回忌

六日(月) 出石但東仏教会

花まつり

九・十日 念仏奉仕団

一一日(土) 福富護宅 三回忌

一八日(土) 降誕会

一九日(日) 中島登美男宅 一三回忌

二六日(日) 永井均宅 一三回忌

二六日(日) 高福寺 永代経

二七日(月) 兵庫教区 実践委員会

花まつり

一日(水) 出石但東仏教会

二日(木) 中島敏博宅 納骨

三日(金) 足立幸夫宅 一周忌

三日(金) 中村ゆかり宅 三回忌

四日(土) 湯口年枝宅 七回忌

四日(土) 出石組 三役会

五日(日) 坂本晃宅 一三回忌

六日(月) 出石但東仏教会

花まつり

九・十日 念仏奉仕団

一一日(土) 福富護宅 三回忌

一八日(土) 降誕会

一九日(日) 中島登美男宅 一三回忌

二六日(日) 永井均宅 一三回忌

二六日(日) 高福寺 永代経

二七日(月) 兵庫教区 実践委員会

花まつり

一日(水) 出石但東仏教会

二日(木) 中島敏博宅 納骨

三日(金) 足立幸夫宅 一周忌

三日(金) 中村ゆかり宅 三回忌

四日(土) 湯口年枝宅 七回忌

四日(土) 出石組 三役会

五日(日) 坂本晃宅 一三回忌

六日(月) 出石但東仏教会

花まつり

九・十日 念仏奉仕団

一一日(土) 福富護宅 三回忌

一八日(土) 降誕会

一九日(日) 中島登美男宅 一三回忌

二六日(日) 永井均宅 一三回忌

二六日(日) 高福寺 永代経

二七日(月) 兵庫教区 実践委員会

花まつり

一日(水) 出石但東仏教会

二日(木) 中島敏博宅 納骨

三日(金) 足立幸夫宅 一周忌

お手間

降誕会

(土) に、法輪会会員、
役員の皆様と共に勤め

勝林寺では、五月一八日

祖母の作る田舎料理の味は忘れられません。
お漬物にしても煮物にしても、それが祖母の味というのでしょうか。伝統の味というので

の味というのでしょうか。伝統の味というのではありますか。今時、スーパーで買つてくるものとは、見ためには同じようなものでも、やはりどこか違いました。味わい深いというのか、深み重みがあると云つたらしいのか。

例えば、「千切り大根」「煮豆」・「蕗やゼンマイの煮物」・新年にいただいた「お雑煮」にいたるまで、祖母のつくってくれたものはひと味もふた味も違いました。「ソリヤー手間がかかる」とるもん。てまひまかけにやーなんでも美味(うま)くはない。料理はどんなもんでも「手間」〈てま〉をいたくくんやもんや。」

それが祖母の口癖でした。

もう一つ。これは祖父(おじいちゃん)のことばといつより心だったと思います。

朝晩の「お正信偈」のあと、おわったらそのままうしろをふりかえり座りなおし、孫のわたしたちに「手間」ということを毎日のようにおなじことを云いました。

「このわしも、あんたらに朝から晩までいろいろお世話を云いました。人間、歳とつて

また、一生、如来さんにもお手間をかけてもらおうて。」

「弥陀成仏のこのかたは、今に十劫をへたまえり」

「煩惱具足、このじじいのよう勝手気まま、自分勝手な極道ものを、ほんに十劫という長い長いむかしから「逃げるものを追いかけ追いかけ」手間暇ご苦労かけて攝取(せつしゅ)してくださる。」

そう云つておじいちゃんはまた、お仏壇のほうにむきなおり、あらためて大声で、「ほんにお手間をかけます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と深々と礼拝するのです。お手間をかけて」とお念仏していたおじいちゃんの後ろ姿が、亡くなつてはや六十年たつた今でも、私のうちには残っております。

親鸞さまが誕生されたのは、西暦では一七三年、承安三年と伝えられてます。

京都の郊外、日野の里に住んでいた日野有範(ひの・ありのり)という下級官僚の長男として生まれました。日野家は、当時貴族政

治の中央に権力をもつていて藤原一族ではありました。父有範は早くから「世捨て人」

として日野の家からも離れていました。母は源氏の家系の人と伝えられていますが男子三人を産み育てては大変な苦労だったよう

です。親鸞さまは幼名を「松若」と云つたと伝えられていますが、ハッキリしたことは分か

りません。

この子は、九才になった春、親戚の者の世話で、天台宗の名刹栗田口の青蓮院という寺の慈鎮和尚(百人一首の歌人・天台座主)という方のもとで出家得度したといわれています。そこで十年間本格的に学問勉強したよ

うです。

なにしろ当時は社会全体院政期から源平武家政治へと社会変動の激しいころ。そのうえ当時は地震・台風・大火・全国的飢饉など自然災害も相次ぎ、京都はあたかも災害難民の増殖(つぼ)のような時代。親鸞さまはその渦中を生きただけに、おのれのことは一切言葉にも書物にも敢えて残したくなかったの

であります。ただいつもその時代の底辺を生きながら、母乳の必要な時期だったので、獸医さんにミルクを分けさせていただき、スポーツで一滴一滴飲ませました。最も親身になつて世話をしたのは、何を隠そな住職でした。だから、藤子は今でも家族の中で住職が一番好きです。努力の甲斐あって、牛乳、キヤットフードへと順調に成長し、今では、

私が家になくてはならない存在です。

子血母(もうぼ) 一一通(せん) の
おしえ

幼い孟子さまを育てたそのおかあさんは偉かった。最初、墓地の近所で遊ばせているうちに、「お葬式ゴッコ」ばかりして遊ぶ子に育つた。そこで母は、市街地の市場のそばに移転した。ところが今度は商売ゴッコ。これは失敗とさうそく学校の近くに転居。読書学問に馴染んだこの子は聖人とよばれるほどに成長しました。(『烈女傳』)

孟子がまだ子どものころ、勉学途中で家に帰つて来た。母は「途中で中断するなんて」と怒り、自分が織つていた織機の布をハサミで断ち切つてしまつた。「学問を中休みするなんてこれと同じだ。もう取り返しはできなくなつる」と。昔の子育て。

覆水(ふくすい) 分盆(ぶんぱん) にかえららず。

復縁を迫つてきたモト妻に太公望(文王の宰相)が云つたことは、そこにある盆をひっくりかえし、「これ見よ、掬えたのは泥だけだ。一旦別れた者、もとへ戻るつてことは到底不可能なことなんだ」

一鬼(おに)を追(おと)うもの(おとこ)は一鬼(おとこ)も得(う)ず。

欲張つて複数のものを獲ようと追つかけると、結局全部失つてしまう。「蛇(ヘビ)・蜂(ハチ)取(と)らず」勉学でも焦点に集中しよう。

巧(こう)言(ごん)口(くち)色(いろ)(こうげん・れいしょく)
辭(すくな) し、仁(じん)。

おべんぢやう・つくり笑顔には眞の誠意は感じられない。こんな人には警戒。(論語)の言葉。

どすん

うちの家族は、一泊以上の出かけから帰宅したら、必ず、真っ先に、「藤子はどう?」と尋ねます。そして、その姿を見つけると、一日散(さん)抱(いだ)き

上げ、ほおざりし、拳(こぶし)の果(くだ)を見つけると、一日散(さん)抱(いだ)き

家族の心を虜にする「藤子」の正体は…猫なんです。

藤子が我が家に仲間入りしたのは、今か

らちょうど三年前。その日は、家族で大町公園の藤の花を見に行つた日でした。帰つて一服している私たちの耳に、子猫の鳴き声が聞こえます。声の主の居所を探して、

ようやく突き止めた場所が、壁の中! 我が家は、古い建物なので、何回か、リフォームしています。その時にできた壁と壁の隙間に、屋根裏で生まれた捨て猫の赤ちゃんが、落ちて鳴いていたのです。すぐにケントプランの湯口さんに来てもらい、何の躊躇もなく壁に穴を開けていただき、救出したのが藤子です。

まだ、母乳の必要な時期だったので、獸医さんにミルクを分けさせていただき、スポーツ

中で世話をしたのは、何を隠そな住職でした。だから、藤子は今でも家族の中で住職が一番好きです。努力の甲斐あって、牛乳、キヤットフードへと順調に成長し、今では、

私が家になくてはならない存在です。

猫には不似合(ふしあわ)いな「藤子」という名前の中にも想像していただけましたか? 若葉の中に薄紫の可憐な花を見つけるこの季節には、いつも思いかえす我が家の心に残るエピソードです。